29-0840

医薬品使用実態調査（DUS）における方法論の評価

○川上 純一[1], 竹村 麻耶[1], 足立 伊佐雄[1], 津谷 喜一郎[2]（[1]富山医薬大病院薬, [2]東大院薬）

【目的】Drug Utilization Study (DUS)は医薬品の使用状況の記述、不適正使用の早期検出、使用改善のための介入および質的管理を可能にして、その適正使用を推進する目的を有している。一方、我が国における DUS には業務集計的な報告が多く、その研究手法や調査内容も統一的な方法はあまり採用されていない。有効性、安全性、経済性および臨床的アウトカムの観点から、医薬品適正使用のための DUS の方法論の確立が必要と考えられる。本研究では、内的妥当性と外的妥当性の観点から DUS の方法論を考察するために、近年に報告されている抗菌剤の DUS を例として、網羅的にレビューしてその現状を評価した。

【方法】医中誌 Web と PubMed を用いて抗菌剤の DUS を検索した。内的妥当性について、調査期間、データソース、集計単位、調査対象、第三者による審査および調査目的を調査した。外的妥当性について、施設の概要に関する記載の有無、調査結果の施設間や他国との類似・相違点、調査結果の外挿可能性を検討した。

【結果・考察】国内論文では、調査目的として適正使用に関連した論文が多かったが、調査結果に基づいて適正使用を考察したものは少なく、使用量の集計のみから適性使用を評価する論文が多かった。集計単位として成分量や金額がよく用いられていた。多数の論文で調査対象やデータソースが明確に示されていなかった。我が国では抗菌剤の DUS は数多く実施されているにも関わらず、その多くは研究方法において内的妥当性と外的妥当性を維持していないことが示唆された。